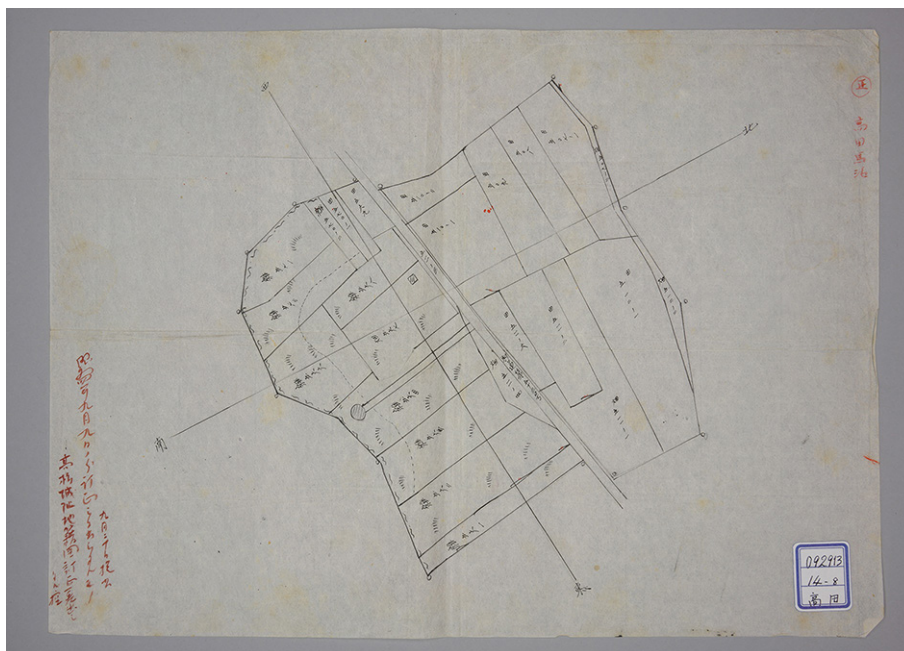


2-5 上田三平へ昭和4年9月20日に追加提出した書類の控えの内

昭和4年9月20日 24.2cm × 33.5cm

岡山市立中央図書館蔵（高田文庫 092.13/44-1）

図の左隅の書き入れに昭和4年9月20日の提出書類の控えとあるので、何らかの経緯から書類が複数回にわたって提出されたことがわかります。これは秀吉の側近であった武将の子孫である、高松町の坪井氏が所蔵していた高松城古図（本書44頁の下の図）の一部を写したものです。

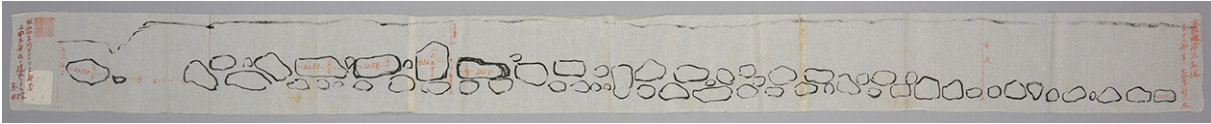


2-5 上田三平へ昭和4年9月20日に追加提出した書類の控えの内

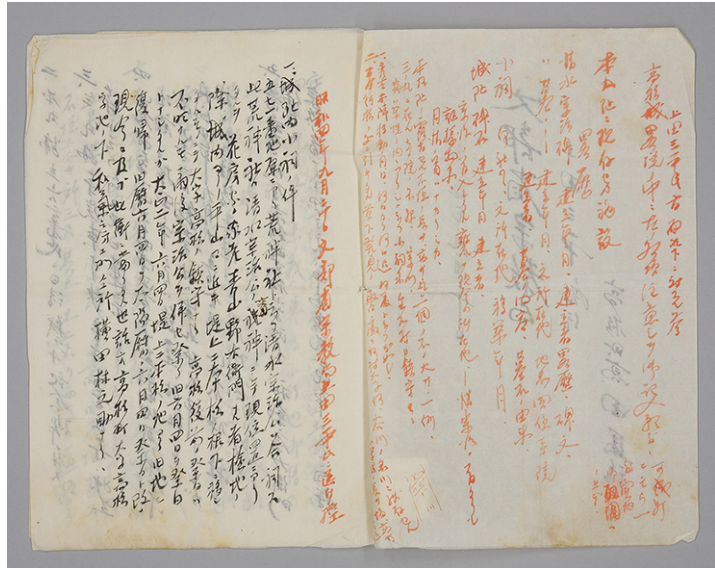
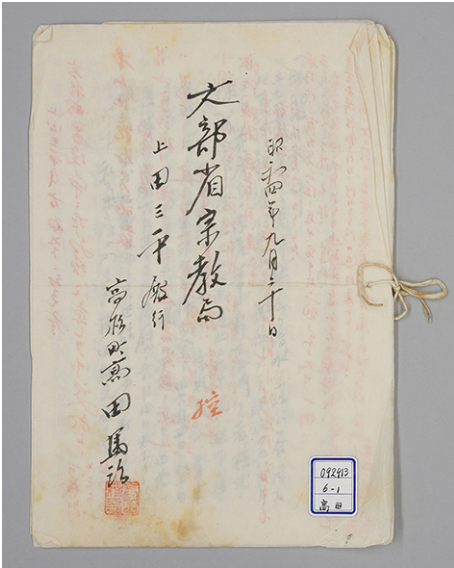
昭和4年9月20日 24.5cm × 33.6cm

岡山市立中央図書館蔵（高田文庫 092.913/14-8）

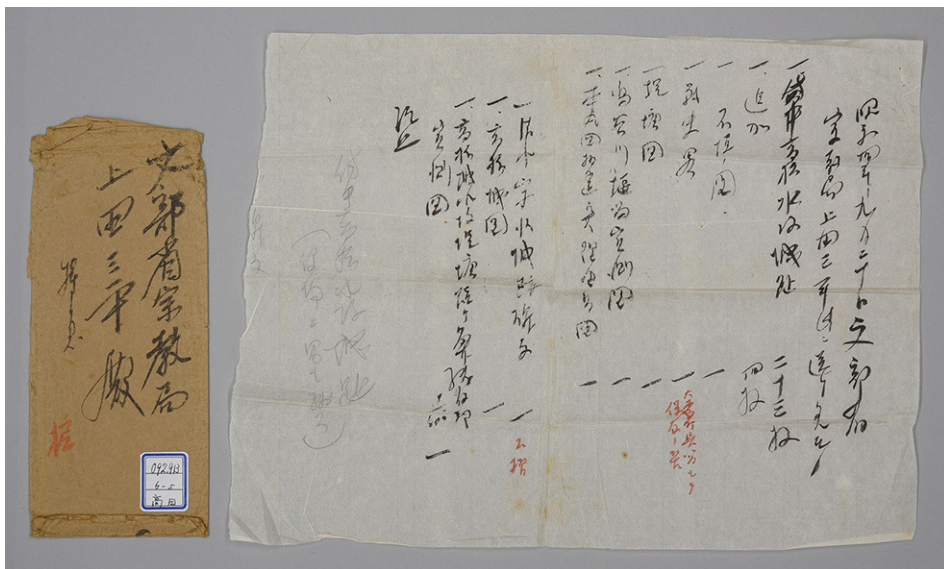
高松城本丸跡を詳しく描いた図です。土地の地番や区画が細かく記入されています。



2-5 上田三平へ昭和4年9月20日に追加提出した書類の控えの内
 昭和4年9月20日 8.3cm × 99.0cm
 岡山市立中央図書館蔵（高田文庫 095.21/3）
 これは高松城本丸の石垣の現状を示した図です。



2-5 上田三平へ昭和4年9月20日に追加提出した書類の控えの内
 昭和4年9月20日 24.5cm × 17.0cm 4丁
 岡山市立中央図書館蔵（高田文庫 092.913/6-1）
 申請した遺構（物件）のそれぞれについて、その歴史的由来や現状などを詳しく
 説明した書類です。こうした説明文の書き手はもちろん、高田馬治に他ならない
 と考えられます。文部省における史蹟指定の所管が宗教局になっています。



2-5 上田三平へ昭和4年9月20日に追加提出した書類の控えの内
 昭和4年9月20日 23.7cm × 17.8cm
 岡山市立中央図書館蔵（高田文庫 092.913/6-5）
 上田三平へ送付した書類の一覧表の控えです。封筒も控えを作っています。

3 高松城趾保興会

高田馬治がまだ高松農学校の学生であった明治36年から翌年の春にかけて、中国鉄道（現在のJR吉備線）の敷設工事によって、秀吉の陣所があった石井山の南麓、蛙ヶ鼻の付近から立田川にかけて残存していた水攻め堤防の一部が掘削され、鉄道の敷地に利用されました。高田馬治は後年の回想で、このとき2名の級友とともに工事現場へ赴き、その場にいた工夫や関係者に掛け合っ、保存の大切さを訴えたことを書き記しています。そのことがどこまで直接の効果をもたらしたかを確かめることはできなくても、彼らの熱意が人々を動かしたのか、次の日曜日に現場を訪れたときは工事が終わっており、それ以上の掘削は行われませんでした。

明治40年に東京九段の偕行社で行われた岡山県出身軍人の新年の会合で、高松城址が話題にのぼり、井原出身で日露戦争後に大蔵大臣を務め、後には東京市長や貴族院議員を歴任する阪谷芳郎が、中国鉄道の一件を嘆いて城址の保存を訴え、城兵を代表して自刃した城将、清水宗治の顕彰を呼びかけるようになりました。

城址の公有化を少しずつ目指す活動は早くも明治9年に始まっていましたが、この頃から地元では遺跡の保存へ向けて機運が盛り上がり、明治42年には高松城址保興会が結成されて高松町役場内に事務所が設けられました。

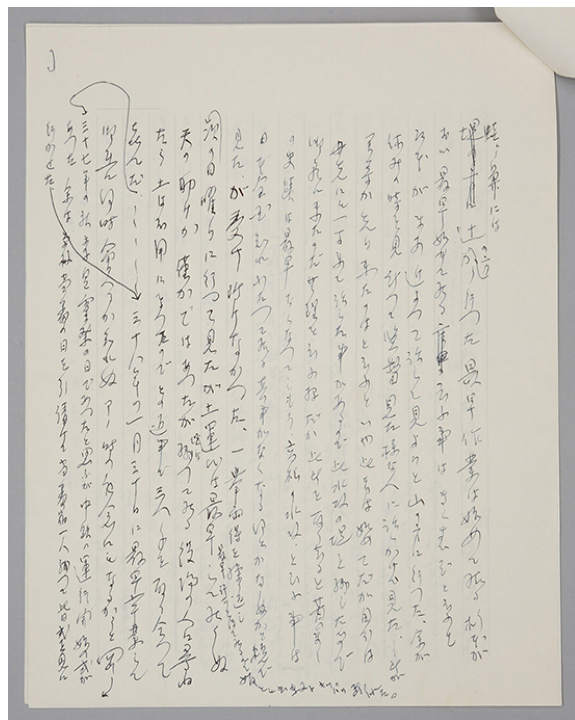
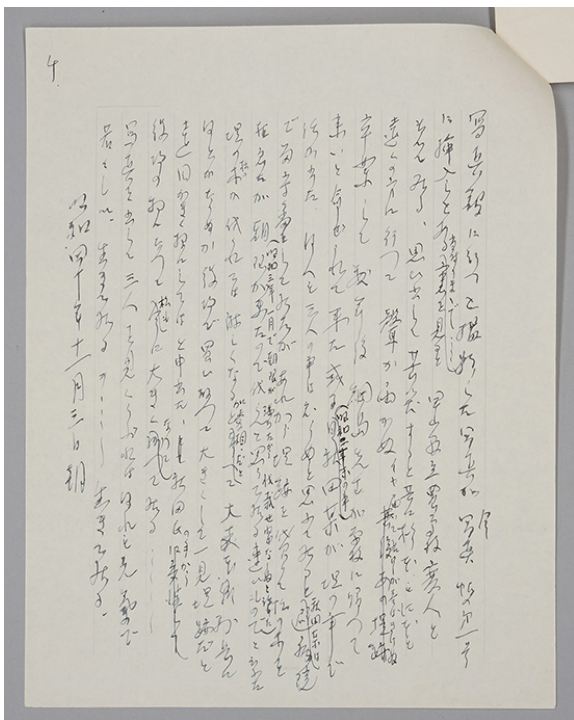
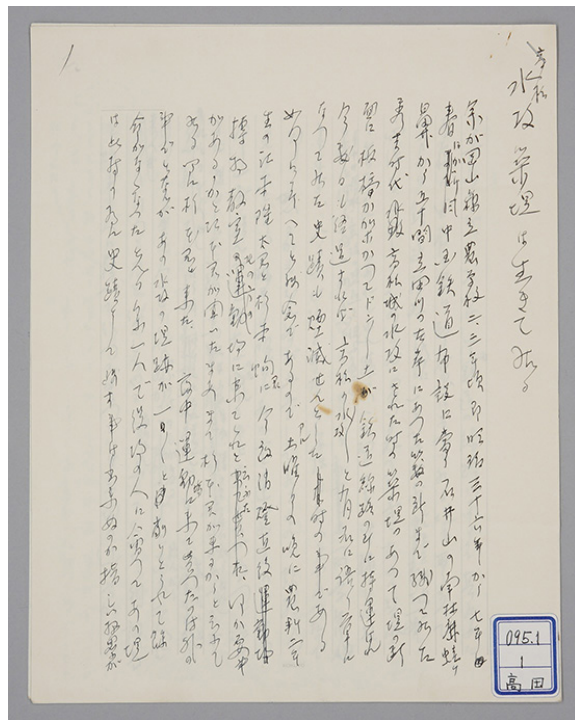
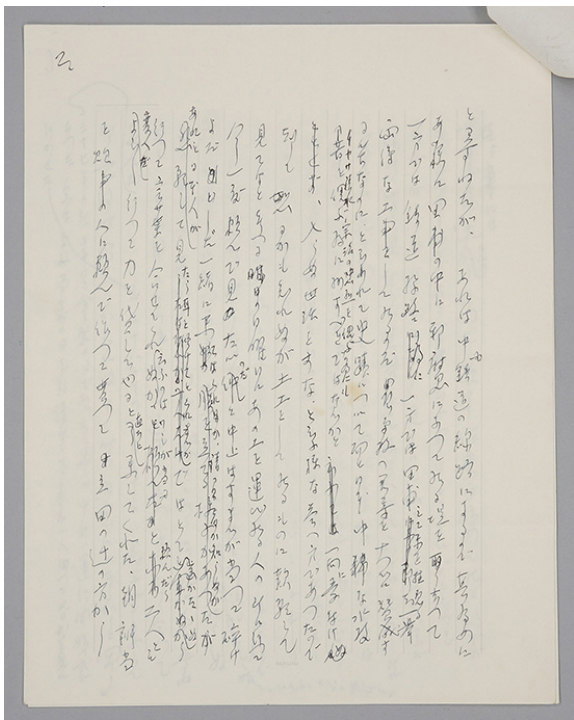
このとき、秀吉が陣を布いた石井山にある持宝院の境内に石塔があり、清水宗治の首塚と伝えられてきましたが、一帯がすでに荒廃していたため、管理を身近な場所で行い、人々の目に触れやすい場所で宗治の顕彰を行うようにするため、保興会において指導的立場にあった和気房右衛門氏と横田林之助氏が中心になって、高松町の承認のもとに、石塔とその地下に埋納されていた遺物を本丸跡へ移転しました。

しかしこのときは平地の柔らかい地盤が石塔の重量に耐えきれずに陥没し、骨片などの埋納品が収められていた備前焼の瓶（甕）の上部が破損するという結果をきました。そこで埋納物は、城址の保護と整備に尽力した和気房右衛門氏が自宅で管理することとなりました。

こうしたことから、明治時代後半のこの時期においてはまだ、学術的な立場からは重視される遺構の現状のままの保存よりも、忠臣・清水宗治とその事績の顕彰を通じて、城址の意義とその由緒を継承していくことに主眼が置かれていことがわかります。しかし昭和期に入って高松城址が史蹟に指定されると、文部省の指導で現状変更は厳しく規制されるようになり、地域においても保存への考え方が変わっていききました。

高松城址保興会の活動を通じて高松町の人々は、小早川家に預けられていて高松戦役を免れ、周防国内の領地を治めてきた清水宗治の次男、源三郎景治の子孫や、清水家が仕えた毛利家、吉川家、小早川家などの旧大名家と交流をもつことができ、山口県にあるゆかりの地を訪問するとともに、昭和10年には清水家当主の忠俊氏と、宗治の実弟で家老を務めた難波伝兵衛の子孫である黒川正太郎氏を高松に迎えて、宗治の追善の行事を行っています。

そうしたことから、昭和11年には清水忠俊氏の名義で本丸の南半の土地が買収され、町へ寄附されると、これに応じて町民有志が北半を買収したので、城址を保存・整備して行くための強固な組織の必要がいわれはじめました。そこで昭和15年には保興会を財団法人とするための寄附が募られ、ゆかりの旧大名家も手を差し伸べましたが、道のりは平坦ではなく、財団法人化は実現をみませんでした。



3-1 高田馬治『高松城水攻築堤は生きて居る』(手稿)

昭和40年11月3日 22.8cm × 17.8cm 4枚

岡山市立中央図書館蔵(高田文庫095.1/1)

高田馬治が高松農学校の学生であった明治36年から翌年春にかけて、2人の級友とともに鉄道の布設工事から水攻め堤防の遺構を守ろうとしたときのことを、晩年になって回想して書いた文章です。未定稿なので挿入や訂正が多く、判読ができていない箇所もありますが、翻刻を右頁に掲出します。

高松水攻築堤は生きて居る

余が岡山県立農学校二、三年頃即明治三十六年から七年

春にかけて中国鉄道布設に当り石井山の南麓蛙ヶ

鼻から五十間立田川の左岸にあつた敷の所まで残つて居た

秀吉時代高松城の水攻にされた時の築堤のあつて堤の断

面に板橋が架かつてドンドン土が鉄道線路の所に持運ばれ

今数日も経過すれば高松の水攻水攻と有名に語り草に

なつて居た史蹟も湮滅せんとした時の事である。

如何に考へても残念であるのでアル土曜日の晩に農科二年

生の江本隆太君と杉本恂君に今夜消燈直後

博物教室の北の方の運動場に来てくれと云ふた。何か要事

があるのかと江本君が聞いた。まあ来て杉本君が来るからと云ふて

居る間に杉本君が来た。夜中運動場に来て貰つたのは外の

事でもないが、あの水攻の堤跡が一日一日と削りとられて余

命がなくなつた。先日余一人で役場の人に会つてあの堤

は此村の為に史蹟として残す事は出来ぬのか。惜しい様思ふが

と尋ねたが、あれは中国鉄道の線路にするので其為めに

あの様に田甫の中に邪魔になつて居る堤を取り去つて

一方では鉄道敷設に、一方では田甫□□□□□□□□一挙

両得な工事をして居るのだ。農学校の君等も大いに賛成す

る筈なのに、と云われて史蹟について何と日本中稀な水攻

の昔を偲ぶ為に、イヤサ清水宗治の忠烈を偲ぶ為にも、残すべきではないかと

一向に受け付けぬ、入らぬ世話をすな、と云ふ様な考へ方であつたので

却て怒るかも知れぬが、土工をして居るものに歎願して

見てはと考へて明日の日曜日にあの土を運び居る人の所に行つて

今一度頼んで見たいのだ。仲々中止はすまいが当つて碎け

よだ。どーだ一緒に来てはくれぬか、請負者知らぬが腹を立てる様子があつたが

あれを日本人が懇願して見たら耳を傾けてはくれまいか。ではとても齒がたためから

行つて言葉合はせてくれぬか。云ふのはワシが当ると頼んだら、二人とも

変人だ。よしよし行つて力を貸してやると直ちに来てくれた。朝弁当

を炊事の人に頼んで作つて貰つて立田の辻の方から

蛙ヶ鼻には辻の方から行つた。最早作業は始めて居る。杉本が

おい最早始めて居る。云ふ事はきくまいぞと云ふと

江本がまあ近よつて話して見ようと山の方に行つた。余が

休みの時を見計つて監督見た様な人に話しかけて見た、・・・所が

君等か。先日来たのはと云ふと、いや此者は始めてだが自分は

先にも一寸来て話した事があるので、此水攻の堤を残したいので

御願に來たのだ。無理を云ふ様だが此所を取り去ると昔のまま

の史蹟は最早なくなつてしまふ。高松の水攻と云ふ事は

日本全国知れわたつて居る。其事がなくなる。何とかならぬかと頼んで

見た、が受け付けなかつた、一挙兩得を繰り返し

最早許可を得て居るので如何とも出来ぬとキツパリ断られた。

次の日曜日に行つて見たが土運びは最早して居らぬ

天の助けか。僅かではあつたが堤は残つて居る。役場の人に尋ね

たら土は不用になつたのでとの返事で、三人手を取り合つて

喜んだ。三十七年の秋季皇霊祭の日であつたと思ふが中鉄の運行開始式が

あつた。余は学校当番の日を引請けて当番宿一人残つて此日式を見に

行かされた。三十八年の一月三十日に最早卒業して

□□□□何時会へるか知れぬアノ時の記念にもなるからと岡

写真館に行つて撮影した写真が、今写真帖の第一号

に挿入してある。当時のままで裏を見ると、岡山県立農学校変人と

書いて居る。思ひ出して苦笑すると共に杉本も江本も

遠くの方に行つて声が届かぬ。イヤ届いて居るが声はきけぬ

卒業して数年後、綱島先生が学校に歸つて

来いと命ぜられて来た或る日(昭和二年末の事)秋田某が堤の事で

話が出た。何人も三人の事は知らぬと思ふて居ると秋田某は避病院

で留守番をして居たが、あれから堤跡を貸りて松の木を

植ゑたが期限(昭和三年一月で期限が満ちたから伐裁せねばならぬと話した)

が来たので伐らんと思つて居る。速いものでと云ふた

堤の松の木が伐られれば淋しくなるが貧相だと考へて大森本衛村長に

何とかならぬか。役場で買い取つて大きくして一見堤跡だと

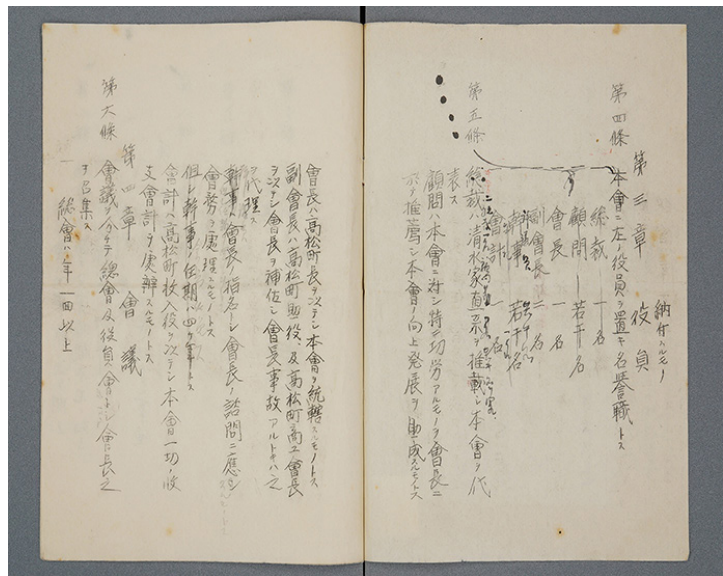
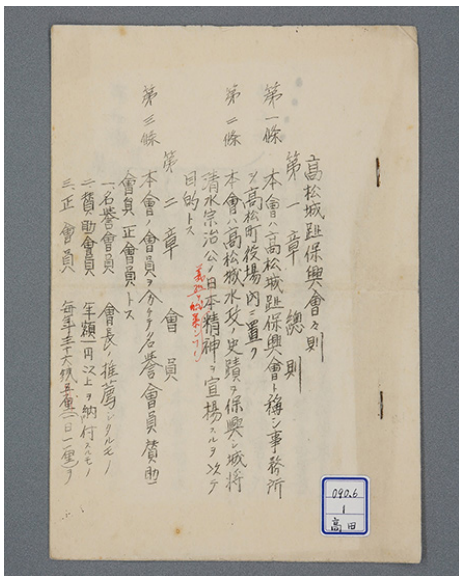
遠目かきく様にしてはと申出た。秋田氏の手から

役場の物になつて松も日々に大きくなつて残つて居る・・・

写真を出して三人を見くらぶれば何れも元気で

若々しい。生きて居る・・・生きて居る。

昭和四十年十一月三日朝

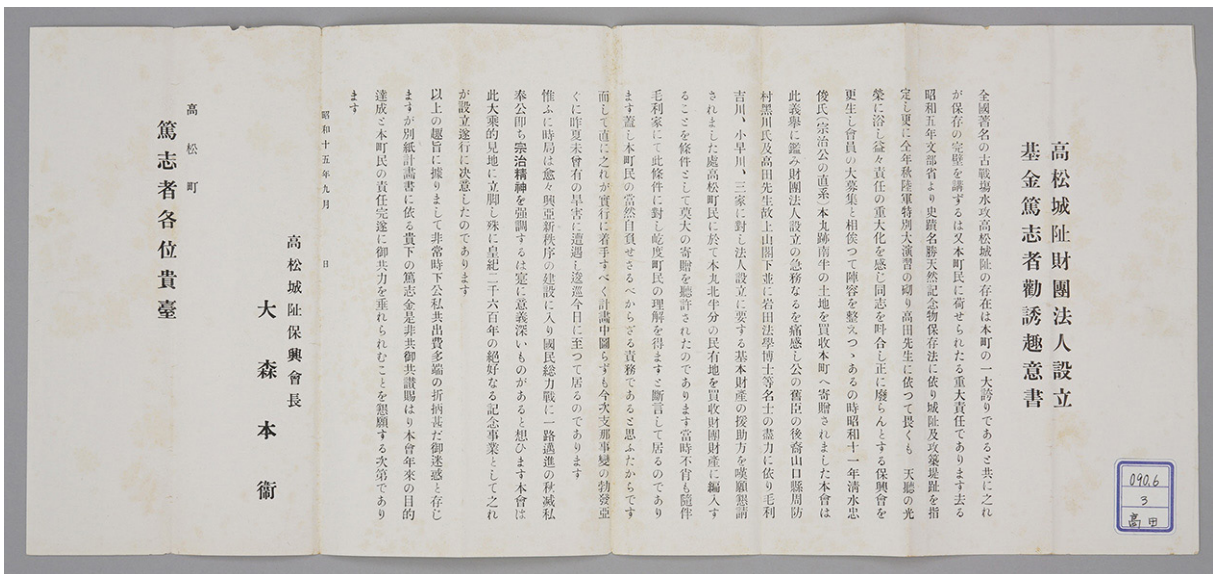


3-2 高松城址保興會々則

作成年月の記載なし（明治42年頃か） 24.5cm × 16.8cm 3丁

岡山市立中央図書館蔵（高田文庫 090.6/1）

保興会の発足を前に、議事かけられた会則案とみられるもので、各所に訂正の書き入れが施されています。



3-3 高松城址財団法人設立基金篤志者勧誘趣意書

昭和15年9月 19.6cm × 44.0cm 1枚

岡山市立中央図書館蔵（高田文庫 090.6/3）

昭和11年に高松城本丸址の南半を清水忠俊氏が買収して町へ寄附すると、北半を町民有志で買収することとなり、史蹟を管理する保興会の財団法人化のため一層の寄附を募ったものです。

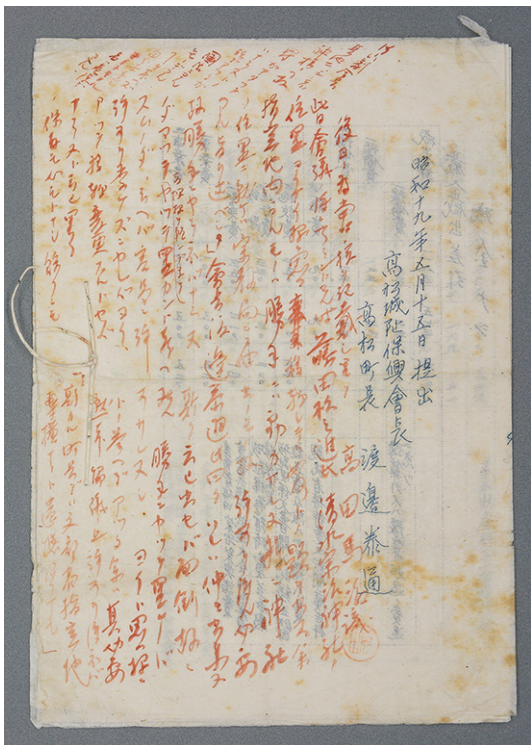
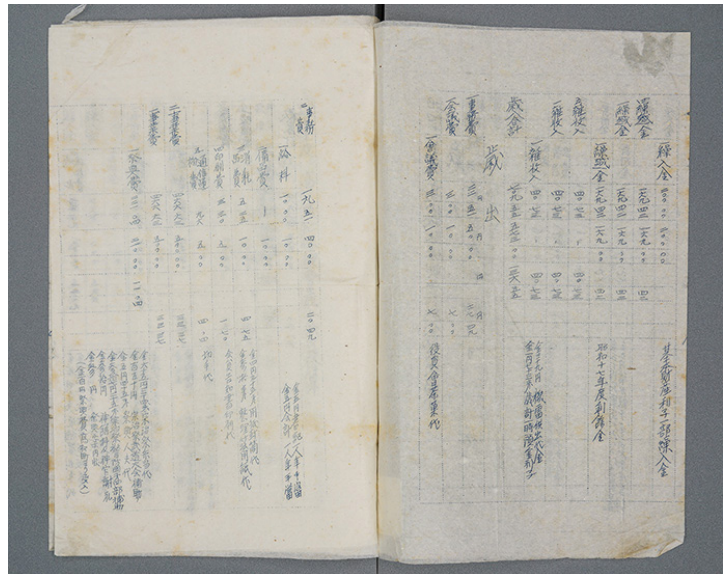
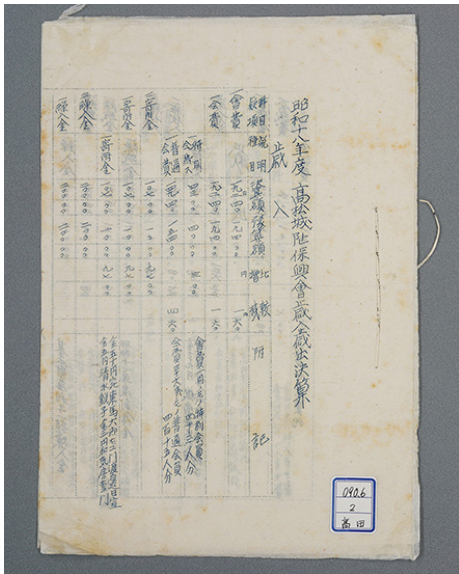
（右頁）皇太子への献上写真帖に用いられた写真

大正期末 それぞれ 22.9cm × 27.6cm、22.9cm × 28.0cm で、24.0cm × 31.3cm の台紙に収納

岡山市立中央図書館蔵（高田文庫 092.13/59-2, 3）

大正15年5月21日の摂政宮（皇太子、後の昭和天皇）の岡山県行啓に際し、高松町では佐上信一岡山県知事の下間により、高田馬治の註解をつけた高松城址史蹟の写真帖を献上しましたが、それに用いられたと同様の写真が2枚保存されてきています。右頁の上は高松城址で、当時の状況がよくわかります。下は高松町の街並で、中央のやや大きい建物が、高田馬治が勤めていた高松農学校の校舎です。





3-4 昭和十八年度と昭和十九年度の高松城址保興會歳入歳出決算
昭和 18 年、19 年 26.3cm × 18.5cm 各年度 2 丁ずつ
岡山市立中央図書館蔵（高田文庫 090.6/2）

高松城址保興會長を兼ねていた高松町長の名前で提出された、保興會の両年度の決算書です。これを見る限り、戦時中も保興會は會費と寄附によって運営され、記念行事と城跡整備を続けていたようです。なお、この書類の末尾（左図）には、清水宗治神社の移設の動議が出たのに対し、高田馬治が史蹟指定地の施設の現状変更の不可を説いて思いとどませた一件が書き記されています。

高田馬治が秀吉の陣所で説明をしているところ

大正 9 年 8 月 6 日撮影 8.3cm × 6.0cm

岡山市立中央図書館蔵（高田文庫 092.13/60）

多数の人が横向きで写っているため、この中の誰が高田馬治なのか、はっきりしませんが、写真の裏面に日付と「余（よ）が中央に立ちて説明する」との書入れがあります。





毛利公爵および毛利家の旧臣らと

昭和8年4月11日撮影 13.2cm × 19.7cm

岡山市立中央図書館蔵（高田文庫 092.88/13）

高田馬治（後列左から2人目）ら高松町の一行は、昭和8年春に山口県を訪れました。熊毛郡の田布施高等女学校では毛利家の当主と旧臣が集まる致識会に参加し、その年はそこで高田馬治が「毛利家勤王の士 清水宗治」と題して講演を行いました。これはそのとき公爵（前列左から2人目）や、重臣の穴戸豊前守の子孫に当たる人（前列左端）らと撮影した記念の写真です。



清水忠俊氏を迎えて行われた宗治公墓前祭

昭和10年10月27日撮影 24.1cm × 30.9cm

岡山市立中央図書館蔵（高田文庫 092.88/11）

前列右から2人目が高田馬治。その奥が清水宗治に殉じた実弟、難波伝兵衛の後裔で、清水家の家老を務めてきた難波氏の子孫の黒川正夫氏です。そしてその前に立っている少年が、当時の清水家の当主、忠俊氏とみられます。清水宗治の子孫を迎えての、高松町をあげての行事だった様子がわかります。



正義霊社 参道（左）と拜殿（右）

撮影時期の記載なし（戦後か？）

岡山市立中央図書館蔵（高田文庫 091.75/3-2）

山口県熊毛郡周防村（現在は光市内）の正義霊社は、清水宗治から八代目の子孫、清水就周が文化 13 年に建立した神社です。高田馬治など高松町の人々は、次の清鏡寺とともにたびたび訪れ、交流を重ねています。



清鏡寺 外観

撮影時期の記載なし（戦後か？）

岡山市立中央図書館蔵（高田文庫 091.88/4-1）

山口県熊毛郡浅江村（現在は光市内）の高松山清鏡寺は、清水宗治の次男で、三原に預けられていたため高松戦役を免れ、家督を継いだ景治が、父・宗治の追善のために文禄 3 年 5 月に建立しました。



清鏡寺の鐘

撮影時期の記載なし

岡山市立中央図書館蔵

（高田文庫 091.88/4-2）

清鏡寺の鐘は、かつて高松城内で用いられていたものと伝えられています。



清鏡寺にある高松戦役殉難七士の墓

撮影時期の記載なし（戦後か？）

岡山市立中央図書館蔵（高田文庫 091.88/4-3）

写っているのは左から、僧・月清（宗治の庶兄）、清水宗治、末近左衛門尉（軍監）、難波伝兵衛（宗治の弟で家老）の墓です。

4 古記録

高松城の水攻め戦役を記録した文書は、その多くが手写本の形で伝えられてきました。

明治時代を迎えると歴史研究が進み、活字の刊本になって出版され、広く読まれるようになった文献も少しずつ増えてきたので、高田馬治はそうしたものを岡山県立図書館などで閲覧して関係箇所を熱心に書写しています。しかし当時はまだ手写本の状態で伝存している古文献も多く、その存在がわかれば所在地を尋ねて、所蔵者から快い了解を得て貴重な原本を閲覧し、一字一句丁寧に書写することを行っています。複写機がなかった時代には便箋にびっしり細かい文字で書き写すか、写真撮影によって古記録のテキスト情報を集めて研究を進めたのでした。

高田馬治が研究のために集めた古記録の写しは多数にのぼっており、ここに展示することができたのはその中の一部です。

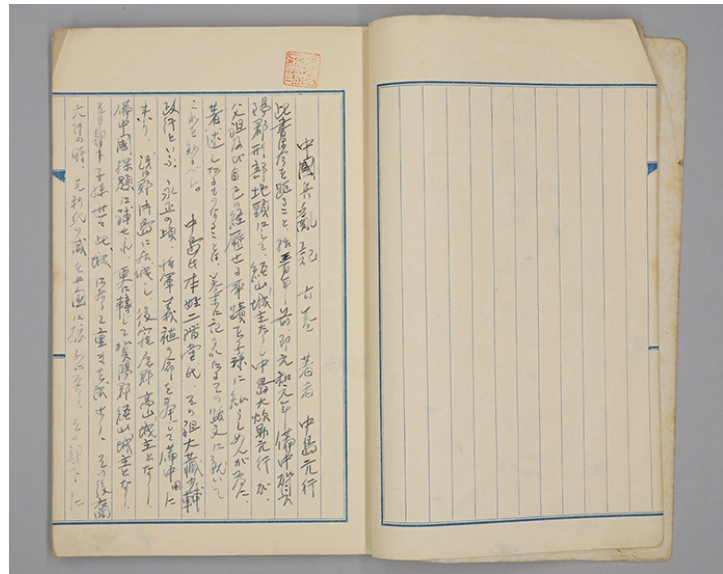
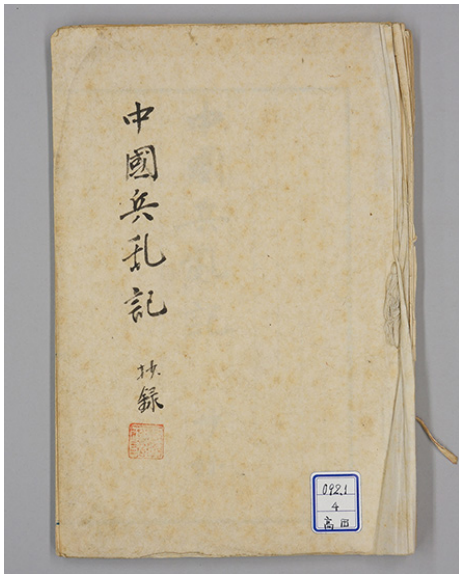
羽柴秀吉の伝記である『太閤記』は、さまざまな著者により多くの異本が作られ、流布しています。その中から、ここには展示しなかった『甫庵太閤記』と『川角太閤記』を岡山県立図書館で刊本から書写していますが、『太閤真蹟記』は旧足守藩主、木下家の所蔵本を書写しています。

また、備中国賀陽郡の経山城主で、清水宗治の娘を妻に迎え、水攻め戦役では主君とともに高松城内に籠城していた武将、中島元行が後年に著した『中国兵乱記』は、戦役の一部始終を直接の体験に基づいて詳しく記した戦記として知られてきました。大正10年には活字による翻刻が『吉備群書集成』第3巻に収録されて公刊されていましたが、高田馬治は元行の11代目の子孫にあたる中島喜一氏を総社町（現在の総社市）を訪ねて、代々所蔵されてきた原本を閲覧しています。

ここに展示した『陰徳太平記』、『高松城攻物語』（別名『佐柿常円入道物語』）のほかには、『高松落城一事』と羽柴秀吉の軍師、竹中半兵衛の子息の竹中重門が著した秀吉の伝記『豊鏡』を岡山県立図書館蔵本から、『高松水責記』を御津郡馬屋下村の伊丹家の蔵本から、それぞれ書写しています。

こうした筆写録は、縦罫の便箋に書かれ、決まった形式の表紙を1枚つけて整理していることが多いですが、『太閤真蹟記』、『備中高松水攻全書』と『高松水責記』は薄手の和紙などに毛筆で記し、紙縫りで綴じてもとの手写本の形態まで再現しようとしています。

また、『池田系図』や、ここには展示しませんでした『古跡物語』など、江戸時代に作られた和装本もいくつか収集しています。

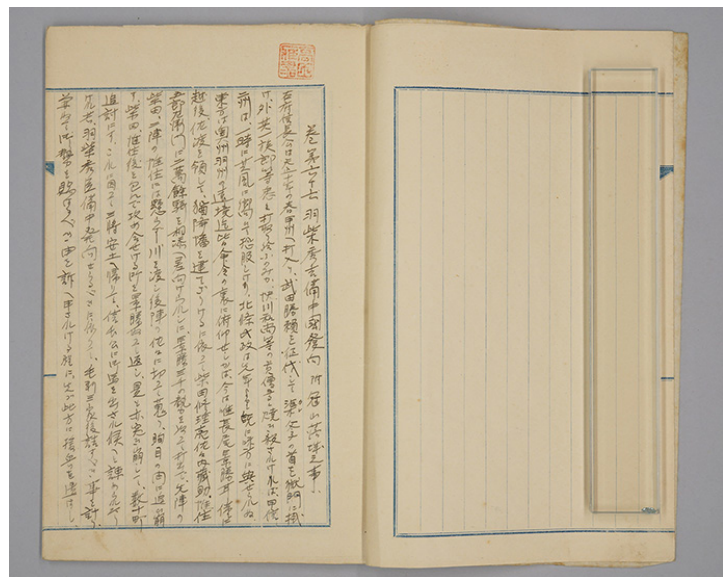
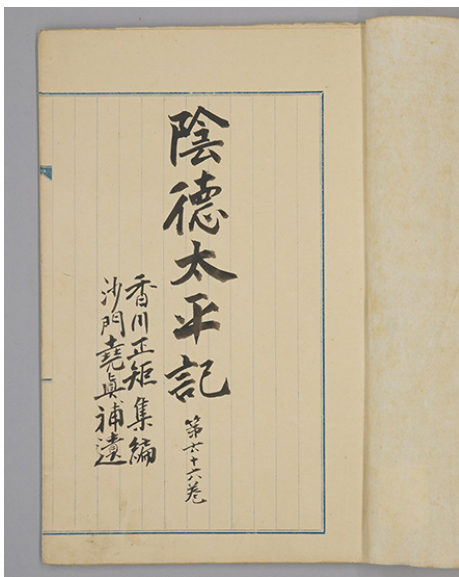


4-1 中島元行（著）、高田馬治（写）『中国兵乱記』抄録

原著は元和元年 24.3cm × 16.4cm 55 頁

岡山市立中央図書館蔵（高田文庫 092.1/4）

著者の中島元行は備中国賀陽郡の経山城主で、清水宗治の娘を妻に迎えており、水攻め合戦の際はともに高松城に籠城した人です。この書物は中国地方全般におよぶ戦記ですが、特に高松戦役については自身の体験に基づいて詳しく書かれています。高田馬治は元行の子孫にあたる中島喜一氏を訪ね、代々所蔵されてきた貴重な原本の閲覧もしています。

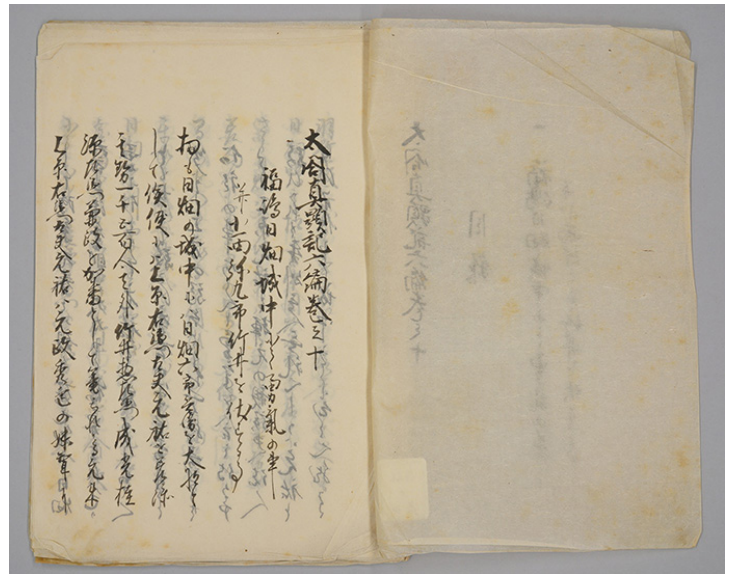
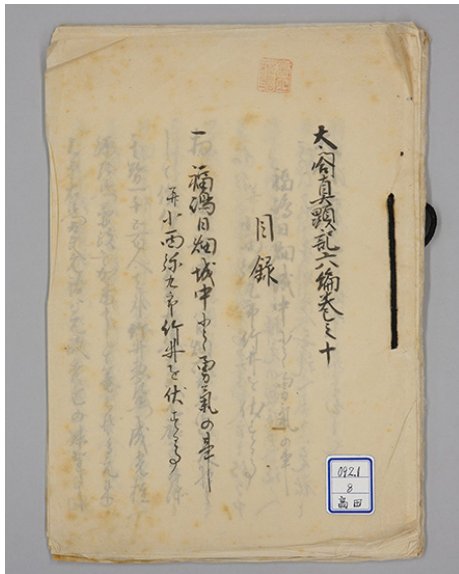


4-2 高田馬治（写）『陰徳太平記』第六十六巻

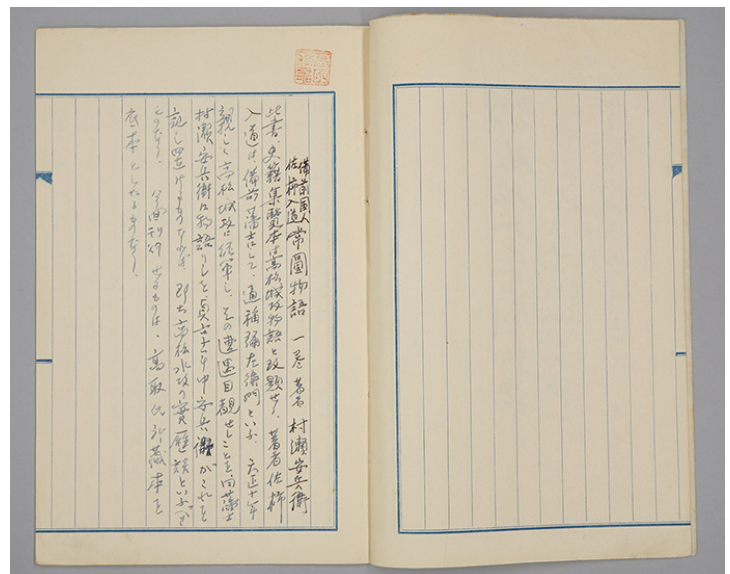
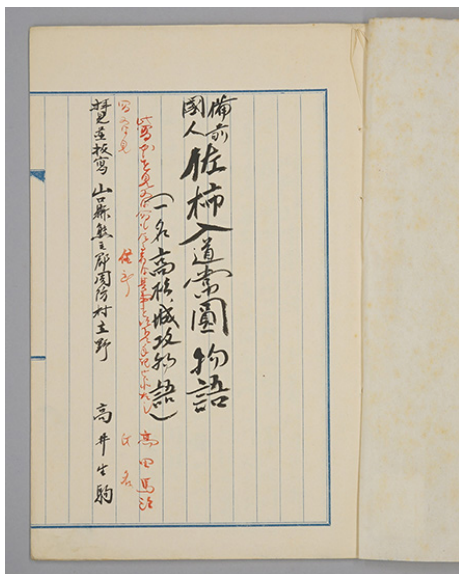
原著は享保 2 年（刊） 24.2cm × 16.3cm 42 頁

岡山市立中央図書館蔵（高田文庫 092.1/5）

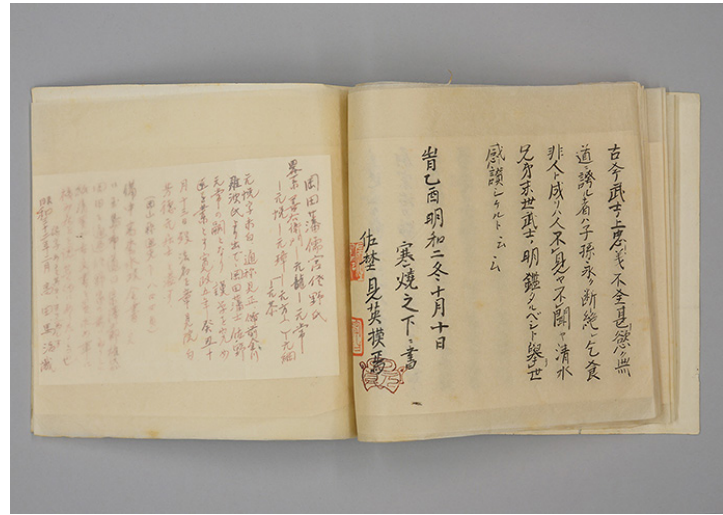
原著は岩国の吉川家で家老を務めた香川氏が編纂し刊行したもので、戦国時代の中国地方について書かれた戦記です。



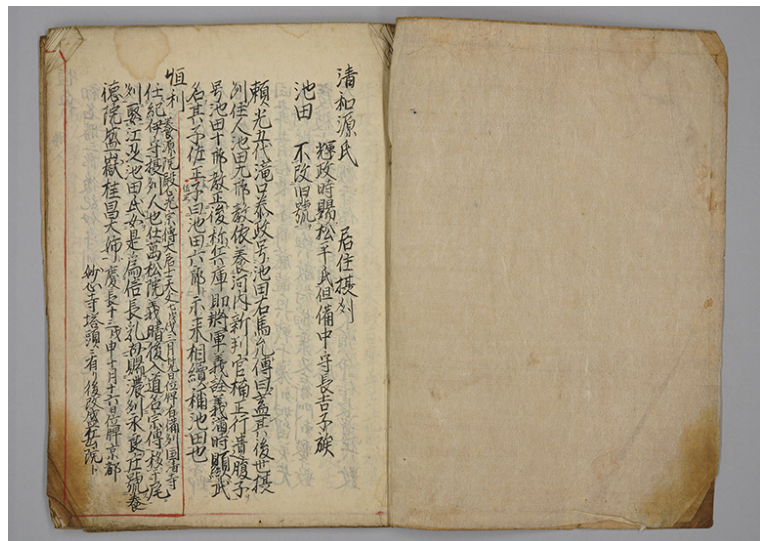
4-3 高田馬治 (写) 『太閤真頭記』六編巻之十
 原著の成立年不詳(江戸時代中～後期か) 25.5cm × 17.7cm 表紙1枚と21丁
 岡山市立中央図書館蔵(高田文庫 092.1/8)
 この書物は羽柴秀吉の伝記「太閤記」の一種といえるものですが、天明7年に大坂で上演された劇の原本になったものともいわれ、内容は講談調でわかりやすく書かれています。この抄録は高田文庫の別の資料(092.13/51-5)に「木ノ下家太閤真頭記中ノ秀吉、小早川、恵瓊事」とある記載から、木下家(旧足守藩主)の蔵書からの書写とみられます。便箋にペン書きではなく、原本の雰囲気伝わるように毛筆で書き写しています。



4-4 村瀬安兵衛 (著)、高田馬治 (写) 『高松城攻物語』完
 原著は貞享4年 25.3cm × 16.6cm 6丁
 岡山市立中央図書館蔵(高田文庫 092.13/1)
 原著は、岡山藩士の村瀬安兵衛が、高松戦役で羽柴秀吉に近侍して参戦した百歳を超える老武士、佐柿常円入道を尋ねあてて聞き取った記録とされるもので、「佐柿常円入道物語」と呼ばれることもあります。なお、左上に掲出した扉の頁には、山口県の正義霊社の高井生駒氏へ貸与したことが記されています。



4-5 佐埜見英 (著)、高田馬治 (写) 『備中高松水攻全書』完
 明和2年 (著)、昭和32年 (写) 17.3 × 18.7 15丁
 岡山市立中央図書館蔵 (高田文庫 092.13/31)
 高松戦役に関して考察した著述です。備中岡田藩の儒官、佐野元悦 (本文中には佐埜見英と表記) の著書ですが、玉島の宗沢節雄氏が原本を入手していたのを高田馬治が書写させてもらったことが、末尾の丁の中に挟まれている1枚の紙片 (上右図) に記されています。



4-6 池田家御系図
 寛政11年 (写) 27.5cm × 19.8cm 表紙および21丁
 岡山市立中央図書館蔵 (高田文庫 092.88/4)
 岡山藩と鳥取藩の藩主を務めた池田家の系図と歴代の事績をまとめたこの書物は、江戸時代に作成された和装本です。高松戦役に関係するさまざまな書物や記録を熱心に筆写して集めた高田馬治でしたが、このような古い和装の書物の原本も、いくつか所蔵していました。

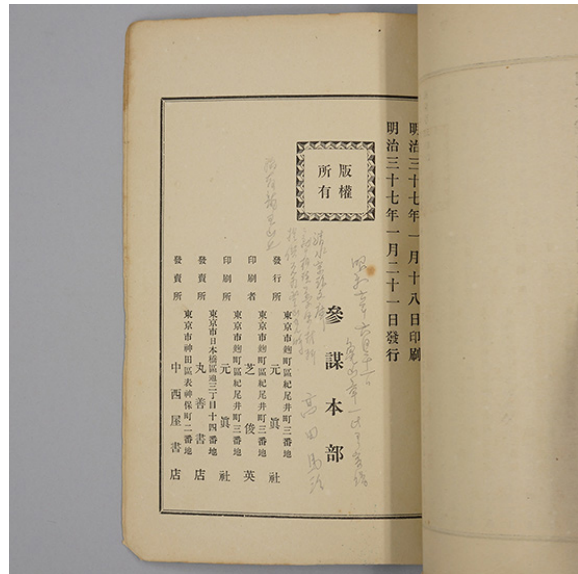
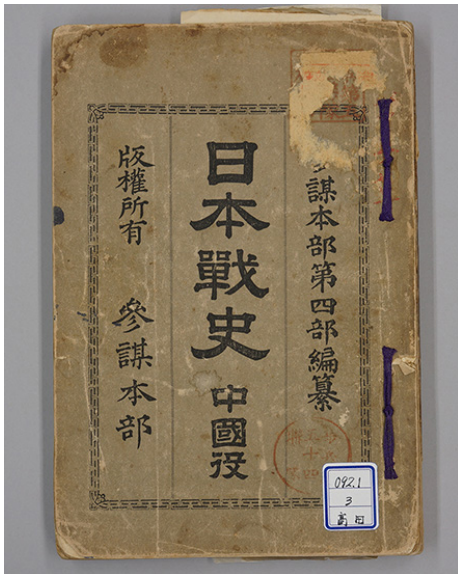
5 研究書

高松城址研究のために集められたのは江戸時代の古記録の手写本だけでなく、同時代の学術書や学術雑誌の記事についても並々ならぬ努力で関係箇所を書き写しおり、しばしば朱文字で詳細な註記を入れ、自身の見解や解釈をあわせて書き記すようにしています。先にみたような、さまざまな書類や書簡の控えを手書きで残したこととあわせて、記録することへの旺盛な意欲が高田馬治の活動を支えていたことがわかります。

また、高田馬治が高松城に関する研究をまとめて発表するたびに、彼の評判を聞いて親交を結ぼうとし、自身の著書や論文を送ってくれる人も増えていきました。こうして彼のもとには数多くの文献が集められて研究を支えましたが、それらに付けられていた手紙や、本そのものに書き入れられている献辞からは、研究を通して広がった交友の幅と、暖かいやりとりの様子が伝わってきます。歴史や地理の研究者をはじめ、軍や戦後は自衛隊において戦史を研究している人まで、さまざまな分野の研究者から贈られた書物はたくさんあり、展示したものはその一部です。

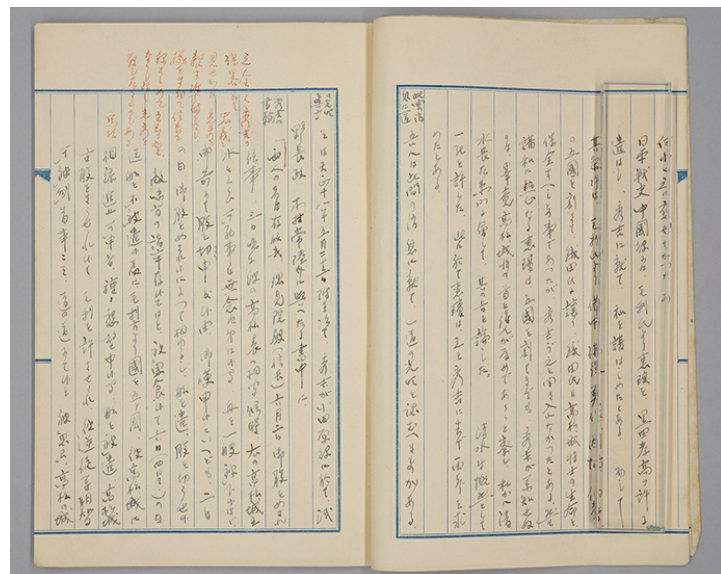
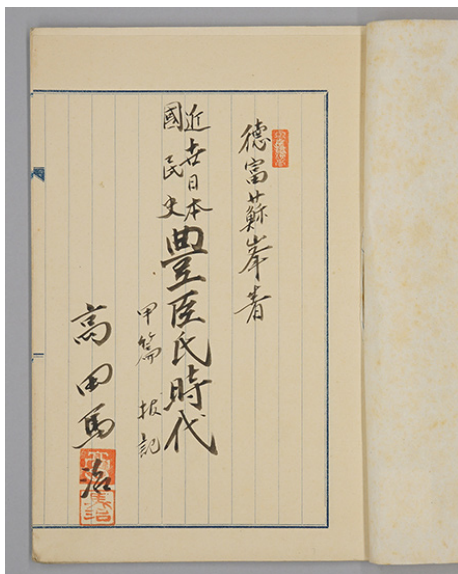
高田馬治は収集した研究資料を求められて他の研究家などへ貸与することも多かったようで、その備忘として書きつけられた言葉が書類や資料のあちこちに記されています。

なお、古記録や研究書の写しは、たいていは縦罫の便箋に書かれており、それに定まった形式の表紙を1枚添えていることが多いのですが、文献の筆写録は54頁の9-1にその一例を示したような、中綴じの市販のノート類に書かれていることもあり、岡山市立中央図書館が所蔵する関係資料の中には思いがけないところにいろいろな記録の写しが書かれていて、なかなか全貌を掴み得ません。



5-1 参謀本部第四部（編）『日本戦史 中国役』
 明治37年1月21日（発行） 22.2cm × 15.0cm 215頁
 岡山市立中央図書館蔵（高田文庫 092.1/3）

陸軍参謀本部が現役の軍人の視点から編纂した戦史のうち、中国地方で行われた合戦を扱った書物です。高田馬治が所蔵していたこの本は、高松水攻めの箇所にも多数の書き込みが施されています。



5-2 徳富蘇峰（著）、高田馬治（写）『近世日本国民史 豊臣時代』抜記
 原著は昭和9～10年（発行） 24.3cm × 16.5cm 表紙および20丁
 岡山市立中央図書館蔵（高田文庫 092.1/10）

国民的ベストセラーとして広く読まれていた徳富蘇峰の豊臣時代史も、先の参謀本部の『日本戦史』とともに精読されています。この写本（抜記）には高田馬治の注記が朱文字でたくさん施されています。